

竹河巻の昇進の記事をめぐって

宮田 光

一

竹河巻の巻末近くに、主要な登場人物の昇進の記事がある。

左大臣¹うせ給て、右は左に、とう大納言²左大将³かけ給へる右大臣になり給。つきくの人々なりあがりて、このかほる中将⁴は中納言に、三位の君⁵は宰相になりて、

(一四九七^⑥)

この記事からわかることと、問題点を挙げてみる。

- 1 「左大臣」は竹河巻初出の人物で、この記事の少し前(一四九七^①)に、玉鬘の大君に失恋した蔵人少将(竹河巻で三位中将)が、この左大臣の女と結婚したことが見える。大島本の、この死去した「左大臣」の傍書に「無系図」と記されるように、この人物は、突然登場してじきに死去するので、便宜上「竹河左大臣」と呼ばれ、他の巻に影響することはない。

- 2 「右」というのは夕霧のことである。夕霧は匂宮巻で「右のおほい殿」(一四一九^⑭)となっており、ここで、右大臣から左大臣に昇進したと記されている。しかし、夕霧の官名は、現行の大島本によってもその他の諸本によっても、紅梅巻及び総角から手習に至る各巻で「右大臣」と「左大臣」が混在している。最近の諸注釈でも、

竹河巻の昇進の記事をめぐって

大島本を尊重して底本とするものが多いが、総角巻が「左大臣」であるという不統一のまま、夕霧を右大臣とするものが多い。

- 3 「とう(藤)大納言」は紅梅のことである。紅梅巻で按察大納言であり、竹河巻でも大納言である。ここで紅梅大納言は右大臣になり、左大将を兼任したと記されている。しかし、紅梅の官名は、宇治十帖を通じてすべて「(按察)大納言」であり、この竹河巻の記事が反映されることはない。

- 4 薫は、匂宮巻で元服後、一四歳で侍従、その秋右近中将となり、また、四位に昇った。一九歳で三位、宰相中将となった。ここで、薫は中納言に昇進したと記される。「さい将^⑦の中將その秋中納言になり給ぬ」(一五五三^⑥)という椎本巻の記事は、この竹河巻の記事と同時に考えられ、その後の呼称も矛盾がない。しかし、薫が紅梅巻ですでに「源中納言」とよばれていることは、作者の先走ったケアレスマスの可能性もある(3頁参照)。

- 5 「三位の君」は、竹河巻で蔵人少将から三位中将となっている夕霧の子息。母は雲居雁。ここで宰相中将になったと記される。総角巻に「左のおほいと、宰相中将」(一六三六^①)、「宰相中将」(一六三九^②)と呼ばれ、この竹河巻の記事との矛盾はない。

このように見えてくると、この昇進の記事のうち、宇治十帖との関係で矛盾があるのは、夕霧と紅梅の二人であることが分かる。以下、こ

の二人について検討する。

二

夕霧は、第三部ではどのように呼ばれているだろうか。官名を示している四一例を諸本により調査したのが、次の表1である。最近、藤本孝一氏・藤井日出子氏により、大島本の夕霧の官名の表記が、竹河・椎本・総角の各巻を除いた巻に於て、「左」が「右」に改変されていることが報告された。筆者も、大島本の一部・影印本・DVDにより、その状態を確認した上で、表1を作成した。「右」と「左」の区別は微妙なものがあるので、表に採用した諸本は、実際に調査した写本・または写真・影印本で見えたものの中、江戸時代より古いと思われるものに限った。諸本を以下に掲げておく。

①「大島本」―古代学協会・古代学研究所編・『大島本源氏物語』（角川書店）

②「明融本」

浮舟―『桃園文庫影印叢書 源氏物語（明融本）Ⅱ』（東海大学出版会）

紅梅・竹河・椎本・総角・早蕨・宿木・東屋・手習―実践女子大学蔵本

③「宗祇本」―（伝宗祇筆・個人蔵）

④「肖柏本」―天理図書館蔵

⑤「書陵部本」―『宮内庁書陵部蔵 青表紙本源氏物語』（新典社）

⑥「大正本」―（大正大学図書館貴重書画像公開ホームページによる）

⑦「正徹本」本―宮内庁書陵部蔵

⑧「紹巴本」―蓬左文庫蔵 紹巴奥書本

⑨「幽斎本」―永青文庫蔵（国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる）

⑩「池田本」―天理図書館蔵

⑪「伏見本」―吉田幸一氏蔵（古典文庫）

⑫「三条西家証本」―『日本大学蔵 源氏物語』（八木書店）

⑬「飯島本」―書芸文化院春敬記念書道文庫蔵 『飯島本源氏物語』（笠間書院）

⑭「尾州家本」―尾州徳川家旧蔵

⑮「高松宮家本」―『高松宮御蔵 河内本源氏物語』（臨川書店）国立歴史民俗博物館蔵

⑯「御物本」―『東山御文庫蔵 源氏物語』（財団法人 日本古典文学会）

⑰「陽明本」―陽明文庫蔵本・『陽明叢書 国書篇』（思文閣出版）

⑱「保坂本」―東京国立博物館蔵 保坂潤治旧蔵本 『保坂本源氏物語影印』（おうふう）

⑲「穂久邇本」―穂久邇文庫蔵

⑲「穂久邇本」―穂久邇文庫蔵 『日本古典文学影印叢刊』（貴重書刊行会）

また、現行の注釈書等の本文も、以下のものを参照した。特に断らない場合、底本は大島本である。（表2）

「大成」―『源氏物語大成』・中央公論社（早蕨―定家本。浮舟―池田本）

「全書」―『日本古典全書』・朝日新聞社

「大系」―『日本古典文学大系』・岩波書店（全巻―書陵部本）

「玉上評釈」―『源氏物語評釈』・角川書店（早蕨―定家本。浮舟―明融本）

「全集」―『日本古典文学全集』・小学館（浮舟―明融本）

「集成」―『新潮日本古典集成』・新潮社（早蕨―定家本。浮舟―明融本。手習―静嘉堂文庫蔵・伝二条為氏筆本）

「完訳」―『完訳 日本の古典』・小学館（早蕨―定家本。浮舟―明融本）

「新全集」―『新編日本古典文学全集』・小学館（早蔵―定家本。浮舟―明融本）

「新大系」―『新日本古典文学大系』岩波書店（浮舟―明融本）

なお、一覧表にするにあたり、「右大臣」「右大臣殿」「右（の）大殿」「右のおほい殿」「右のおとど」などはすべて「右」に、「左大臣」「左大臣殿」「左（の）大殿」「左のおほい殿」「左のおとど」などはすべて「左」に簡略化した。○は改変の跡が明らかに確認できる場合、△は判断が難しい場合、「左」↓「右」は、本来「左」であったものを「右」に改変した場合、／は脱落、ヒは見せ消チを示す。傍書は右側に記入した。

その結果、諸本すべて一致しているのは、4〜15（昇進の記事を含む竹河巻）と16（薫も夕霧もまだ昇進していない惟本巻の初め）である。陽明本を除き、諸本すべて一致しているのは27（宿木巻の直物の記事）である。4〜15・16については、一致して当然であるので検討しない。27については、後の（四）で検討する。残る二七例を検討するにあたり、表の諸本の中、⑭⑮は河内本であり、本来校訂本であるため、原態を考えるには不適当と考えて除いた。また⑬及び⑯は青表紙本・河内本・別本が混在している本であるため、検討の対象から除いた。

残った①〜⑫の諸本は、大体青表紙本と見てよいと思われる。それらの諸本の夕霧の官名を比較検討すると、

A、大島本・明融本・宗祇本・肖柏本・書陵部本・大正本・正徹一本・紹巴本は、ほぼ「左大臣」系。

B、池田本・伏見本・三条西家証本は、ほぼ「右大臣」系。

C、幽斎本は「右大臣」系の本文を「左大臣」系で訂正している。ことが分かる。

この分布を見ると、青表紙本の中には、竹河巻の昇進の後の夕霧の官職を、A左大臣とするか、B右大臣とするかの二つの流れがあり、

竹河巻の昇進の記事をめぐって

前者の方が主流であるように思われる。総合的に判断して、Bの諸本よりはる大島本の方がすぐれていると思われるし、従来大島本が尊重されてきたことでもあり、大島本が改変されているのならば、ともかく原態に戻してみるべきだと考える。大島本の、改変が明らかでない23〜26・28〜32・37を、「右」から「左」に戻すと、総角く手習の各巻で、夕霧を左大臣とするのは、27を除き、二一例中一七例である。誤写の可能性も考えると、大島本では、総角以降の各巻で、夕霧を左大臣と考えるべきであろう。

なお、紅梅巻について言えば、大島本の1〜3は「右」であり、改変の跡は見られない。これは、明融本1を除き、「左大臣」系の諸本とは異なっているが、これも「右大臣」とすべきであろう。しかし、その結果として、紅梅巻を竹河巻より後年とする従来の年立を一年ほど前に改めなければならぬ可能性が発生することになる。

紅梅巻の年立上の位置は、「源中納言」（一四五二⑫・一四五七⑦）という薫の呼称によって決められてきた。竹河巻末に薫の任中納言の記事があり、それより後と考えられるからである。一方、紅梅巻の、紅梅大納言・夕霧右大臣という官職は、竹河巻末の、紅梅右大臣・夕霧左大臣という官職より後年にはなり得ない。薫の呼称か或は紅梅及び夕霧の呼称かのどちらかが誤りであろう。恐らく、薫を「源中納言」とした、作者のケアレミスと思われるが、ここでは、その可能性を指摘するにとどめておく。

三

紅梅が官名で呼ばれるのは、第三部では一七例（大島本）であり、その内訳は「按察大納言」5、「按察」1、「大納言殿」2、「大納言君」1、「大納言」4、「藤大納言」3、「大臣殿」1、である。諸本ともその呼称にはば準じている。「大臣殿」（穂久邇本「右大臣」、保

表1 -(2)-

	⑩池田	⑪伏見	⑫三条西証	⑬飯島	⑭尾州	⑮高松宮	⑯御物	⑰陽明	⑱保坂	⑲穂久邇
1	右	右大將	左←、右、	右	右	右	右大將	右大將	右	右
2	右	右	左←、右	右	右	右	右	右	右	右
3	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右
4	右	右	右	右	右	右	右	右	みき	右
5	右	右	右	右	右	右	右	右	みき	右
6	右	右	右	右	右	右	右	右	みき	右
7	右	右	右	右	右	右	右	右	みき	右
8	右	右	右	△右	右	右	右	右	右	右
9	右	右	右	右	みき	みき	右	右	右	右
10	右	左	右	右	右	右	右	右	右	右
11	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右
12	右	右	右	△右	右	右	右	右	右	右
13	右は左に	右は左に	右は左に	右は左に	右は左に	右は左に	右 左に	右は左に	右はひたりに	・・左に
14	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左
15	大臣	左←、右	左、	左	左	左	左	左	左	左
16	右	右	右	右	右	右	左←、右	左	みき	右
17	右		右	右	右	右	右	右	みき	右
18	右		右	右	右	右	右	右	みき	右
19	右	右	右	右	右	右	右	みき	みき	右
20	みき	右	みき	みき	右	右	右	みき	みき	右
21	右	右	右	右	右	右	右	みき	みき	右
22	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右
23	右	右	左、	右	右	右	右	みき	みき	右
24	右	右	右	右	右	右	右	みき	みき	右
25	右	右	右	左	右	右	右	みき	みき	右
26	右	みき	右	右	みき	右	みき	みき	みき	右
27	右	右	右	右	右	右	みき	右大將	右	右
28	右	右	右	左、	左→ 右	右	右	左	みき	右
29	右	みき	右	右	みき	右	右	ひたり	みき	右
30	右	右	右、	右	みき	右	みき	左	みき	右
31	右	右	右	右	みき	右	みき	ひたり	みき	右
32	さ	左	右	右	右、	右	右	左	右	右
33	大との	右	右	右	右	右	みき	右	右	左
34	右	みき	右、	右	右	右	右	みき	右	右
35	右	右	右、	右	右	右	右	右	右	右
36	右	右	右、	右	右	右	右	みき	右	右
37	右	右	右、	右	右	右	右	左	右	左
38	みき	右	右		みき	みき	みき	左	右	左
39	右	右	左、	右	右	右	右	左	右	左
40	右	右	右	右	右	右	右	右大將	右	右
41	みき	右	右	右	右	右	右	左大將	みき	右

竹河巻の昇進の記事をめぐって

表1 -(1)-

	巻名(大成・頁行)	①大 島	②明 融	③宗 抵	④肖 柏	⑤書陵部	⑥大 正	⑦正徹一	⑧紹 巴	⑨幽 斎
1	紅梅 1448-9	右	右	左	左	左	左	左	左	左← _ミ 右
2	" 1451-12	右	左	左	左	左	左	左	左	左← _ミ 右
3	" 1456-7	右	左	左	左	左	左	左	左	左← _ミ 右
4	竹河 1464-3	右	右	右	右	右	右	右	右	右
5	" 1465-5	右	右	右	右	右	右	右	右	右
6	" 1467-2	右	右	右	右	右	右	右	右	右
7	" 1467-8	右	右	右	右	右	右	右	右	右
8	" 1483-9	右	右	右	右	右	右	右	右	右
9	" 1488-4	右	右	右	右	右	右	右	右	右
10	" 1489-10	_ミ 左 → 右 _(ミ)	右	右	右	右	右	右	右	右
11	" 1491-11	右	右	右	右	右	右	右	右	右
12	" 1492-8	右	右	右	右	右	右	右	右	右
13	" 1497-6	右は左に	右は左に	右は左に	右は左に	右は左に	右は左に	右は左に	右はひたりに	右は左に
14	" 1500-1	左	左	左	左	左	左	左	左	左
15	" 1500-10	左	左 _ミ	左	左	左	左	左	左	左
16	椎本 1547-6	右	右	右	右	右	右	右	右	_ミ 左→右
17	総角 1634-8	左	左 _ミ	左	左	左	左	左	左	左← _ミ 右
18	" 1636-1	左	左	左	左	左	左	左	左	左
19	" 1642-14	左	左	左	左	左	左	左	左	左
20	" 1648-1	ひたり	左	左	左	ひたり	左	左	ひたり	左
21	" 1651-14	左	左	左	左	左	左	左	左	左
22	早蕨 1691-5	_ミ 右	左	左	左	左	左	左	左	左← _ミ 右
23	宿木 1705-11	㊦ → 右	左	左	左	左	左	左	左	左← _ミ 右
24	" 1708-2	㊦ → 右	左	左	左	左	左	左	左	左
25	" 1717-6	㊦ → 右	左	左	左	左	左	左	ひたり	左
26	" 1720-7	㊦ → 右	左	左	左	左	左	左	左	左 _ミ
27	" 1770-4	右	右	右	右	右	右	右	右	右
28	" 1770-11	㊦ → 右	左	左	左	左	左	左	左	左← _ミ 右
29	" 1773-2	㊦ → 右	左	左	左	左	左	左	左	左← _ミ 右
30	" 1777-4	㊦ → みき	左	左	左	左	左	右	左	左← _ミ 右
31	" 1780-8	㊦ → みき	左	左	左	左	左	左	左	左← _ミ 右
32	東屋 1806-8	㊦ → 右	左	左	左	左	左	_ミ 右	左	左← _ミ 右
33	" 1823-1	右	左	左	左	左	左	左	左	左← _ミ 右
34	浮舟 1866-7		右	右	左	左	左	右	左	左← _ミ 右
35	" 1871-3		右	左← _ミ 右	左	左	左	右	左	右
36	" 1879-13		右	右	左	左	左	左	左	左← _ミ 右
37	蜻蛉 1966-10	㊦ → 右	左	左	左	右 _ミ	右	左	左	左
38	" 1970-3	ひたり	左	左	左	左← _ミ みき _ミ	右	左	左	左← _ミ 右
39	" 1976-9	左	左	左	左	右 _ミ	右	左	左	左
40	手習 2026-4	右	左	右	左	左	左	左	左	左
41	" 2044-4	右	左	右	左	左	左	左	左	左← _ミ 右

竹河巻の昇進の記事をめぐって

表 2

	巻名(大成・頁行)	大 成	全 書	大 系	玉上評釈	全 集	集 成	完 訳	新全集	新大系
1	紅梅 1448- 9	右	右	右	右	右	右	右	右	右
2	" 1451-12	右	右	左	右	右	右	右	右	右
3	" 1456- 7	右	右	右	右	右	右	右	右	右
4	竹河 1464- 3	右	右	右	右	右	右	右	右	右
5	" 1465- 5	右	右	右	右	右	右	右	右	右
6	" 1467- 2	右	右	右	右	右	右	右	右	右
7	" 1467- 8	右	右	右	右	右	右	右	右	右
8	" 1483- 9	右	右	右	右	右	右	右	右	右
9	" 1488- 4	右	右	右	右	右	右	右	右	右
10	" 1489-10	右	右	右	右	右	右	右	右	右
11	" 1491-11	右	右	右	右	右	右	右	右	右
12	" 1492- 8	右	右	右	右	右	右	右	右	右
13	" 1497- 6	右は左に	右は左に	右は左に	右は左に	右は左に	右は左に	右は左に	右は左に	右は左に
14	" 1500- 1	左	左	左	左	左	左	左	左	左
15	" 1500-10	左	左	左	左	左	左	左	左	左
16	椎本 1547- 6	右	右	右	右	右	右	右	右	右
17	総角 1634- 8	左	左	左	左	左	右	左	左	左
18	" 1636- 1	左	左	左	左	左	右	左	左	左
19	" 1642-14	左	左	左	左	左	右	左	左	左
20	" 1648- 1	ひたり	左	左	左	左	右	左	左	左
21	" 1651-14	左	左	左	左	左	右	左	左	左
22	早蕨 1691- 5	右	右	左	右	右	右	右	右	右
23	宿木 1705-11	右	右	左	右	右	右	右	右	右
24	" 1708- 2	右	右	左	右	右	右	右	右	右
25	" 1717- 6	右	右	左	右	右	右	右	右	右
26	" 1720- 7	右	右	左	右	右	右	右	右	右
27	" 1770- 4	右	右	右	右	右	右	右	右	右
28	" 1770-11	右	右	左	右	右	右	右	右	右
29	" 1773- 2	右	右	左	右	右	右	右	右	右
30	" 1777- 4	みき	右	左	右	右	右	右	右	右
31	" 1780- 8	みき	右	左	右	右	右	右	右	右
32	東屋 1806- 8	右	右	右	右	右	右	右	右	右
33	" 1823- 1	右	右	左	右	右	右	右	右	右
34	浮舟 1866- 7	右	右	左	右	右	右	右	右	右
35	" 1871- 3	右	右	左	右	右	右	右	右	右
36	" 1879-13	右	右	左	右	右	右	右	右	右
37	蜻蛉 1966-10	右	右	左	右	右	右	右	右	右
38	" 1970- 3	ひたり	右	左	左	左	右	左	左	左
39	" 1976- 9	左	右	左	右	左	右	左	左	左
40	手習 2026- 4	右	右	左	右	右	右	右	右	右
41	" 2044- 4	右	右	左	右	右	右	右	右	右

竹河巻の昇進の記事をめぐって

坂本「右のおほいとの」と呼ばれるのは、竹河巻の昇進後の一例のみで、その他はすべて、紅梅が（按察）大納言であることを示している。竹河巻によれば、紅梅は右大臣で左大將を兼任したとある。左大將や右大將は、実際には中納言・大納言・右大臣・左大臣などと兼任するのが常であるので、この記事は、異例ではない。しかし、右大臣が大納言を兼任する例はないので、「大納言」と呼ばれることは、右大臣と兼任していない、即ち右大臣ではないことを意味すると思われる。大島本の紅梅の記事の傍書に「紅梅のおととなり」（紅梅一四四七①）、「この時は右大臣なり（略）本の官をかけるは物語の作者の詞なり」（『花鳥余情』の引用。宿木一七〇七④）と注さなければならぬのは、紅梅を右大臣と呼ぶ例が宇治十帖に見当たらないからである。そもそも紅梅は、どのような人物として描かれているのだろうか。紅梅は頭中將と右大臣四君の間に生まれた二男である。兄は柏木である。

やつこのつばかりにてこゑいとおもしろく（略）世の人の思へるよせおもくておぼえことにかしづけり。心ばへもかどくしうかたちもおかしくて（略）たかさごをいだしてうたふ。いとうつくし。

（賢木三七三⑦）

かのたかさごうたひし君もかうぶりせさせて

（澤標四八六⑥）

弁少將ひやうしうちいでゝしのびやかにうたふこゑすゞ虫にまがひたり。

（篝火八五七⑨）

弁の少將ひやうしとりてむめがえいだしたるほどいとおかし。わらはにてゐんふたぎのおりたかさごうたひし君なり

（梅枝九八〇⑨）

例の弁少將こゑいとなつかしくてあしがきをうたふ。

（藤裏葉一〇〇三⑤）

弁の少將のこゑすぐれたり。

（藤裏葉一〇一八⑭）

第一部では、人望もあり、容貌も才能もすぐれ、声もよく、前途有

竹河巻の昇進の記事をめぐって

望な若者として描かれている。しかし、第二部になると、柏木に後事を託され、柏木の没後、法事を行なう姿は、頭中將家の後継者と目される筈が、

弁君はたおもふ心なきにしもあらでけしきばみけるに、ことのほかなる御もてなしにけるに、はじめてえまでとぶらひ給はずなりにたり。

（柏木一三二〇②）

と、未亡人の落葉宮に言い寄っても問題にもされず、恥ずかしくて寄り付かなくなってしまうことが語られる。第三部になって、紅梅巻では、蜷宮の未亡人の真木柱と結婚、東宮に大君を入れ、中君を匂宮にと志すが、うまく行かない。ともかく、これは頭中將家の後継者にふさわしい行動ではある。竹河巻では、玉鬘とはそれ程親しくないこと、大納言から右大臣へ昇進することがあるが、久しぶりに登場したからか、相変らず「たかさごうたひしよ」（竹河一四六七⑦）と紹介される。宿木巻では、薫と女二宮の結婚に際して、

あぜちの大納言は、我こそかゝるめもみんと思しがねたのわざやと思給へり。この宮の御は、女御をぞむかし心かけきこえかよひ給へけるを、まいり給てのちも猶思はなれぬさまにきこえかよひ給て、はては宮を得たてまつらむの心つきたりければ、御うしろみのぞむけしきもらし申けれど、きこしめしだにつたへずなりにければ、いと心やましと思て（略）いみじくそしりつぶやき申給けれど、さすがゆかしければ、まいりて心のうちにぞはらたち給へりける

（宿木一七七八⑫）

あぜちもむかしすぐれ給へりし御声のなごりなれば

（宿木一七八〇⑬）

と、女二宮の後見を望むが相手にもされず、面白くなくて立腹しながら、それでも藤花の宴に参上、和歌を詠じ、歌を謡っている。この時の紅梅は五六、七歳。三〇歳も若い薫と競うなど、笑止という他はない。宿木巻で描かれる紅梅は、とても右大臣に相応しい人物とは言え

まい。

四

ところで、宿木巻の直物の薫の昇進の記事には、不可解なところがある。

きさらぎのついたちごろに、なおしものとかいふことに権大納言になり給て右大将かけ給つ。右のおほいとのひだりにておほしけるが、じゝ給へる所なりけり。

(宿木一七七〇③)

この「右大臣」は誰なのだろう。諸本を調べても、陽明本が「右大将ひたりになり給てかへ給へる」(宿木一二〇ウ)とある以外は、すべて「右の大殿(おほい殿・大い殿・おほいとの・おほととの・大臣殿)」である。現行の諸注釈では、「全書」「玉上評釈」「全集」「集成」「新全集」「新大系」は、夕霧右大臣が兼任していた左大将を辞し、それまでの右大将が左大将に転じ、そのあとに薫が任じられた、とする。

「大系」だけは、紅梅右大臣が兼任の左大将を辞した、とする。「大系」は書陵部本を底本としているため、夕霧は左大臣で一貫しているからである。夕霧が右大臣ではなく、左大臣であると読む立場からすると、本来なら、右大臣は紅梅の筈であるが、直物の記事の後の藤花の宴の参加者として、「みぎのおとぎ、あぜちの大納言」とう中納言、左兵衛のかみ(宿木一七七七④)とあり、さらに続く「あぜちの大納言は(略)はらたち給へりける」(一七七八⑫)「はらたつ大納言」(一七八〇④)「あぜちもむかしすぐれ給へりし御声」(一七八〇⑥)という記述からすると、この大納言は紅梅以外ではあり得ない。直物の記事の「右大臣」は、竹河巻の「左大臣」を系図にない「竹河左大臣」と呼ぶように、女二宮の婿となる薫を昇進させるために便宜的に登場した、「宿木右大臣」とでも呼ぶべき人物ではなからうか。結局、竹河巻以外に、紅梅を右大臣と呼ぶ例は一つもないのである。

紅梅は、賢木巻で登場したときには注目されるべき人物と考えられていたかもしれないが、その後、紅梅を特徴づけるものは声がよいことだけであり、柏木の死後は頭中将家の中心となるべき立場でありながら、落葉宮に失恋し、さらに、今上帝の女二宮にも年甲斐もなく一方的に失恋するという、声以外に取柄のない、右大臣に相応しくない人物に変貌してしまった。作者は、竹河巻の昇進の記事を敢えて無視し、紅梅を大納言のまま放置したのである。

五

作者は、なぜ紅梅の昇進を無視したのだろうか。以下、臆測によって述べることをお許しいただきたい。

竹河巻末の昇進の記事は、作者が、一旦物語の筆を擱くつもりで、関係者を「めでたく」昇進させたものと思われる。幻巻で物語を中断した作者が、周囲からの再三の要請によって再び書き始めたのが、勾宮・紅梅・竹河の三帖であり、その時点では、宇治十帖の構想はできあがっていなかったと思われる。

八の宮の姫君にも御心ざしのあさからでいとしげうまうでありき給。(紅梅・一四五八⑨)

うぢのひめ君の心とまりておぼゆるも、かうざまなるけはひのおかしきぞかしと思ひ給へり。(竹河・一四九九⑨)

宇治十帖の伏線か、とも読める、この二つの記事は、紅梅・竹河の二巻の時間が宇治十帖と重なることに気づいた作者による、補筆であろう。勾宮と薫とが、宇治の八宮の姫君と恋をする、ぐらいの大まかな構想はあったかも知れないが。

勾宮巻は光源氏の一族の後日譚としての新しい男主人公たちの紹介であるからともかくとして、紅梅巻は頭中将家の後日譚、竹河巻は玉鬘家の後日譚であり、正篇を補足するものであって、新しい物語の発

端ではない。もし、宇治十帖の構想が完成していたとすれば、紅梅・竹河の二巻は書かれなかったかも知れない。

ともかく、その後、宇治十帖は書き継がれた。竹河巻の記事により、主要な人物は昇進した。その後の夕霧も左大臣とすべきであろう。しかし紅梅だけは、不注意によるものではなく、作者が意図的に昇進させなかったと思われる。夕霧は明石中宮の兄であり、大君は東宮と、中君は二宮と、六君は次の東宮と目される匂宮と結婚させるといふ、いわば藤原道長のような立場である。薫の実父が柏木であることを知る人は母宮と弁尼だけであり、薫は、世間からは、光源氏の内親王腹の子息として、重んじられている。「この御ぞうより外に人なきころをひ」(竹河一四九七⑧)というように、光源氏の一族だけが栄華を承け継ぐという、物語の大きな流れの中では、紅梅も玉鬘の子供たちも、取り残されるしかなかった。

その後、この紅梅の官名に関する、竹河巻と宇治十帖との間の明らかな矛盾により、竹河巻の昇進の記事が疑われることになった。次いで、「左」と「右」が誤りやすいこともあって、夕霧も昇進せず右大臣のままとする本が一部に流布し、有力な写本である大島本も、恐らく江戸時代に、見せ消ちではなく、改変を隠すような「なぞり」「加筆」「胡粉」などによって、改変されてしまった。総角巻は直し忘れたのであろう。それが現在に至るまで諸本に影響を与え、諸注釈の混乱の原因となったと思われる。

〈注〉

※1 以下、数字は『源氏物語大成』の頁数と行数である。濁点・句読点・傍線は、筆者が付けたものである。

※2 藤本孝一「大島本源氏物語の写本学的研究」(『大島本源氏物語の再検討』所収・和泉書院・二〇〇九年一〇月)

※3 藤井日出子「右大臣と左大臣——大島本における夕霧の官位表

竹河巻の昇進の記事をめぐって

記をめぐって——」(『国際教養学部論叢』第一巻第二号・中京大学国際教養学部・二〇〇九)

※4 藤本孝一氏は透過光及びパソコンによるコントラスト等により、「なぞり」「追筆」「胡粉塗抹」による改変が行なわれたことを明らかにされた。胡粉は、平仮名のためになぞりや加筆が不可能な個所で使われており、藤本氏は、これらの改変が江戸時代に行なわれたと述べて居られる。

※5 一々の例は挙げないが、例えば、筆者も著者の一人として参加している『源氏物語注釈・八』(風間書房・二〇一〇年一二月)の「校異」の作業の経験による感触である。

※6 大島本は浮舟巻を欠くが、大島本に近く、「左大臣」系である明融本の中で、定家本の面影を残すと思われる、桃園文庫本の浮舟巻では、夕霧は「右」大臣である。このように、「右」と「左」の問題は諸本の系統を精査しないと簡単には語れないが、拙稿は、とりあえず大島本を原態に戻すことを主眼とした仮説であることをお断りしておく。

※7 この個所は、大島本は本来「ひたり」であるが、上に胡粉を塗って抹消し、「みき」と改変されている。

※8 現行の注釈書は「大系」(『書陵部本を底本とする』)以外は殆ど大島本を底本としている。総角巻は改変を免れていて「左」のままであるが、『集成』は、すべて「右」に校訂している。逆に「大系」では「他本によって(四・補注三〇五)」、「左」を「右」に改めている個所がある、など。

〈付記〉

本稿を成すにあたり、藤井日出子氏の御教示をいただきました。また、藤本孝一氏からは、御懇切な御指導をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。